

# 改訂「倫理・社会」について

松 扉 繁 磨

今回発表された新しい改訂学習指導要領を受け取って「倫理・社会」を特に創設以来現場で指導実践してきた現場人は、それぞれの受けとめ方・感想を持ったことであろう。事実、どのように改訂されたか、その学習指導要領を通して主として目標について考えてみたい。

## ・目 標 (1)

「現行」

- ・人間尊重の精神に基づいて、人間や社会のあり方について思索させ、自主的な人格の確立を旨とする。
- ・民主的で平和的な国家や社会の形成者としての資質を養う。

「改訂」

- ・人間尊重の精神に基づいて、人間や社会についての思索を深め、倫理的価値に関する理解力や判断力を養う。

・民主的、平和的な国家・社会の形成者として、自主的な人格の形成に努める態度を養う。

「現行」の目標(1)は「倫理・社会」の基本的、総合的な目標をあらわし、「改訂」の目標(1)もやはり「倫理・社会」という科目の全体的目標と解することができる。「現行」の目標はいささか曖昧模糊の感じが強くて、現場人にとって科目の指導上困惑と戸惑いを感じていたが、この「改訂」では従来のものよりは明確にされスッキリした感じを与えているように思われる。いろいろと思索を深めて、「自主的な人格の確立を旨とし……資質を養う」よりも「倫理的価値に関する理解力や判断力を養い……自主的な人格の形成に努める態度を養う」の方が具体的であり、その旨とするところを一応ハッキリさせているように思う。ハッキリさせてスッキリしていることと問題点が少なくなったことは別である。「改訂」において「倫理的価値に関する理解力や判断力を養う」が目標付けられたことは、その適否、または指導精神の過剰・不足のいずれにせよ、新味があるとともに大いに注目すべきところとなるだろう。「倫理的価値」そのものをどのように解釈するかにはわかにはわかりにくい、普通は超個人的・超個人的なものとして見られるだろう。従ってそれを養成すれば勢い「人格形成」に役立つことが考えられる。「学習指導要領案」には「自己の人格形成に努める態度」として反省的な態度、内省的な態度をハッキリ打ち出している。国家のために人間が形成されるという観点が強調され過ぎるようになるとすれば、ようやく根づきはじめた個人主義的な人間尊重論があやしくなるのではないかと心配されるだろう。「改訂」においては「自主的な人格の形成に努める態度」として表現をもっともらしく変えているが、真のねらいはいつこにあるのだろうか。関心多きところである。

## ・目 標 (2)

「現行」

- ・人間の心理や行動を社会や文化との関連において理解させる。
- ・青年期における身近な問題を通して、人間としての自覚を深める。

## 「改訂」

- ・現代社会について客観的に認識させるとともに、そこにおける人間の生き方について考えさせる。
- ・青年期における自己形成の課題を自覚させる。

「現行」の目標(2)は「倫理・社会」の内容の(1)「人間性の理解」に対応する個別的な目標であることは勿論である。「改訂」の目標(2)は内容の(1)「現代と人間」に対応する個別的な目標であることも容易に理解できる。

「倫理・社会」の現行の指導内容は、(1)人間性の理解（心理学的領域）(2)人生観・世界観（倫理学的領域）(3)現代社会と人間関係（社会学的領域）の三つの部分から成り立っている。この(1)と(3)が統合されて改訂の内容(1)「現代と人間」に再構成されたのである。現行の目標(4)は上記(3)「現代社会と人間関係」の内容に対応する個別的な目標である。それによると、次の2つの点がある。

- ・現代社会について科学的、合理的に理解させるとともに、そこにおける人間関係のあり方について考えさせる。
- ・人間や社会や文化の問題について、これを建設的に解決していこうとする態度とそれに必要な能力を養う。

「現行」の目標(2)、(4)と「改訂」の目標(2)を比較してみるといろいろ考えられる。

- (1) 現行の「現代社会について科学的、合理的に理解させる」が改訂では、「現代社会について客観的に認識させる」となる。科学的、合理的理解はどうしても社会に対する批判を前面に押し出す傾向をもち、客観的に認識するは事実を事実として認識させるにとどまる傾向をもつと考えられる。
- (2) 現行の「そこにおける人間関係のあり方について考えさせる」は学習指導要領案においても同一であったが、改訂においては、「そこにおける人間の生き方について考えさせる」となっている。このように変ってきた意図についていろいろ考えさせられるところがある。
- (3) 現行の「人間や社会や文化の問題について、これを建設的に解決していこうとする態度とそれに必要な能力を養う」が改訂では除かれている。社会が進歩するためには甚だ必要な要件であると思うが、余りにも社会に対して改革心が先行し刺激されるのを恐れたものであろうか。いろいろ考えさせられる。
- (4) 現行の「青年期における身近な問題を通して、人間としての自覚を深める」が改訂では「青年期における自己形成の課題を自覚させる」となっている。これは表現としてはたしかに具体的であり、はっきりしているように思われる。人間としての自覚から自己形成の課題への自覚に変えられた背景に何か考えさせられるものがある。

## ・目 標 (3)

### 「現行」

- ・人生観・世界観の確立に資するために、先哲の人間や社会に対する基本的な考え方を理解させる。
- ・その基本的な考え方をみずからの問題に結びつけて考察する能力と態度を養う。

### 「改訂」

- ・人生観・世界観の確立に資するために、人間や社会に対する先哲の基本的な考え方を理解

させる。

- ・その基本的な考え方をみずからの問題と結びつけて、行為の倫理的な価値や基準について判断できる能力をつちかう。

目標(3)は現行、改訂ともに内容(2)の「人生観・世界観」に対応する個別的な目標である。この2つの目標を比べていろいろ考えさせられる。

(1) 先哲の基本的な考え方を理解させることは共通している。しかし内容の精選・集約・再構成を通して学習の効率化を図る意図がうかがわれる。「西洋の考え方」、「東洋の考え方」、「日本の考え方」、「現代の考え方」という内容から「思想の源流」、「現代と思想」、「日本の思想」という内容の組み方に変ってきている。

(2) 現行の内容の組み方は、どうしても思想史的な展開が主な取り扱い方になっている。今度の改訂においては思想史的になる傾向を避けるような配慮が強い。「先哲の考え方について、その時代的背景との結びつきにもふれながらこれを取り扱う」配慮が除かれている。改訂においては、ものの考え方の基本的問題として最少限、次の観点を示している。哲学的なものの考え方、倫理的価値と人格形成、芸術と人生、人生における宗教の意味、科学的なものの考え方、個人と国家、民主主義の倫理の7項目である。

(3) 学習内容を精選して効率的学習をすることは必要であるが、改訂においては、学習方法におけるさまざまな取り上げ方があるとの関心を弾力的に示して

(イ) 先哲の基本的な考え方を中心にするもの

(ロ) ものの考え方の基本的問題などを中心にするもの

(ハ) 思想の歴史的展開を中心にするもの

(ニ) 東西の先哲の著作や言行の一部などとそれに関する設問を中心にするものを指示する。

このように学習方法がいろいろあることは一面からいえば弾力性があってよいことだが、他面では、現場人をして困惑させる大きな原因ともなる。(イ)と(ロ)は主題学習であり、(ハ)は思想史的取り扱いであり、(ニ)は著作中心の取り扱い方である。

(4) 現行における「考察する能力」を改訂においては「行為の倫理的な価値や基準について判断できる能力」と明示したことはその適否は別として、表現としては具体的であり、わかりやすいと思う。そしてはっきりと倫理的価値観を思考の中に作用させることをねらっている。このことは思考の価値観を内向的、内省的ならしめるものである。そして広い立場に立って公正に判断できる能力を求めねばならないとしている。

## ・目 標 (4)

「改訂」・現代の社会に生きる人間として、常に自己の考え方や行為を反省し批判していく自主的態度や、倫理的実践を高めようとする自覚的な態度と、それらに必要な能力を養う。とある。これについていろいろ考えられる。

(1) 一般に「現行」においても「改訂」においても、総合的・全体的目標と、それぞれの内容と対応関係に立つ個別的目標とから成り立っている形式は同じである。しかし「改訂」の目標(4)については内容との直接的な対応関係がみうけられないように思われる。そして形式的にだけこれを見ると、他の目標や内容との直接的有機的関連を欠いている異質的要素とも考えられる。しかし、この目標(4)は基本的・全体的ねらいをもっている目標(1)に向っての学習の結果、やがて到達されるべき望ましい態度・能力を具体的に示したものと理解するのが妥当ではなからうか。

(2) 「改訂案」における「現代に生きる人間として」を「改訂」において「現代の社会に生

きる人間として」と改められていることを注意したい。

- (3) 改訂においては、体制順応型の受け身のタイプの間が期待されている。現行の目標には少なくとも、文化・人間・社会というものには当然歴史的存在として解決されるべき諸問題があり、それに取り組めうる人間をつくるという考え方の基調がある。改訂においては、社会・人間・文化というものは一つの所与で、その所与の中で自己を反省し批判し自覚するという考え方の基調がある。国家・社会その他の体制への批判的着眼をそらして、個人の内面に反省の契機を求めようとする。学習の姿勢として理論的・知的なものを好まず、感情的・心情的なものを期待する。
- (4) 科学的な認識の弱化が感ぜられる。われわれは歴史的・社会的な事実をまず客観的に認識して、その上に人間の価値判断とかモラルとかを、われわれ自身主体的に創るべきである。にもかかわらずその科学的な認識の方面を弱めてむしろ、人間の心情的な側面において主観的な自覚をつくらせようとする。従って客観的認識として理解されるべきものである道徳とか価値判断とかいうものを、人間の心の中の問題として過度に局限することは、危険な独善に流れると指摘したい。

## ・む す び

学習指導要領の改訂により、一段と改善された良き教科書の出現によって、従来の不満・批判に応じて指導の効率化を図る努力に期待する。それには次の如き配慮を重要な視点として加えることが必要である。

- (イ) 教科書の内容が百科辞書的な平板な記述ではなく、「精選と構造化」をふまえて考え方の基本的問題に関心をもって深く学習できるようにする。
- (ロ) 思索を深める目標に照らして、積極的に考えさせるだけの明確な手がかりとなる豊かな内容をもつようにする。
- (ハ) 古典などの読書によって思索を深める意義を認識し、「読む力」「表現する力」をつける学習過程の必要を強調する。
- (ニ) 指導方法を明確にしてその具体化の課題に応える積極的意図と用意をもつべきである。